

「お疲れさまでしたー！ お先に失礼します」

挨拶をして仕事を後にすると、仕事中の顔を少しずつ消しながら同居人の待つ家へと足を向かわせる。

きつと、今日も朝から夕方までの数時間しかないのにも関わらず、部屋は散らかされているのだろう。ずっと家にいるのだから片付けてくれればいいのに、なんて何度言っても無駄だと分かっているのに、思わずにはいられない。

数時間であれだけ部屋を散らかせるのは、もはや才能だ。そういう大会があったら迷わず出場させるのに。

「はぁ……」

帰ってからの片づけを考えると、無意識にため息が出た。ため息ついてたら幸せが逃げるより、なんて笑いながら言ってくる同居人の顔が浮かんできた。自分で想像してしまったものなのに、本物と変わらず鬱陶しくて少し口元が緩んだ。

一人ニヤける自分の気味悪さに気づいて、私はきゅつと口元を引き締めた。そして目の前の階段を見上げる。その先には小さなさびれた神社。ここ最近の私の小さな楽しみが、この上にいる。

「よし……」

気合を入れ直すと、私は運動不足で重い足を動かしながら階段をあがった。

一番上に到着する頃には、息が上がりきっていた。荒い息を落ち着かせながら、目的のものを探す。それは、いつもと同じ場所に居た。

ふらふらと目的へと近づく私の視線は、神殿へ続く階段の一番上にいるそれに釘づけだった。賽銭箱の前で寝ていたその子は、私に気付くと耳をピクリとさせて顔を上げて、にやあと鳴いた。

「あー！ 今日もかわいい！ なによ鳴いちやって！ そろそろ覚えてくれた？」

そう言いながら駆け寄って、猫のいる段の数段下にしゃがむ。視線を合わせると、じつと見つめ返してくれて、もう一度にやあ、と鳴いた。

「そうかそうかー！」

言葉が通じているなんて思っていないけれど、いいタイミングで返事があったのが嬉しくなって会話を続ける。

「あゝ、癒される……」

その後は、ひたすら猫を撫でた。気持ちよさそうに目なんかつぶってお腹を見せるもんだから、益々可愛く見えてくる。

「お前はかわいいな。うちのもこれくらい可愛げがあればな」

なんて独り言を言いながら、満足いくまで猫を撫でると私は手を離れた。

「また来るね、ばいばい！」

猫はにやあー、とこれまたタイミングよく鳴き声をあげて私を送り出してくれた。

それから数日後、私はいつものように神社を訪れていた。息を切らして目指すのは、可愛い野良猫様のもと。だったはずなのに、猫はおらず、その代わりに知らない女の子がいた。いつもなら猫がいる場所である、神殿へと続く階段の一番上に腰かけているその子。制服姿で、見た目からすると高校生だろうか。

ここで人と会うなんて思っていなかった私は、予想外の人物を思いきり見つめてしまった。すると、寝ていたのか目を瞑っていた女の子が目をあけて、ぼつちり視線が合った。

「あゝ……こんにちは？」

少し迷った末に挨拶をする。

「こんにちは。なんで、疑問形なの？」

変な人と思われるかと不安だったが、女の子は少し笑いながら挨拶を返してくれた。

「なんとなく？」

「なんとなくかー」

取りあえず少し神殿に近づいて、きよろきよろいつものあの子を探す。

「猫？」

「そう！　なんで分かったの？」

「なんとなく？」

無邪気な笑顔でそう返された。

「なんとなくかー」

釣られて笑ってしいながら、きつとこの子も猫に会いに来てるんだろうなと思った。

「猫なら今日は見てないよ」

「会いたかったのにな」

「そんなにあの猫好きなの？」

「好きだよ！　私の癒しかな」

「そっか」

ニコニコとするその子の雰囲気は、柔らかくて女の子らしくて、目立ちほしくないけど多分学校ではモテるんだろうな、なんて思った。

「猫もそんな風に言って貰えて嬉しいと思うよ」

「そうかな」

「そうだよー。ところで、お姉さん名前なんて言うの？」

「紗那」

「さな？」

「そうそう」

「紗那かー」

「あなたは？」

「……：柚」

「柚ね」

「うん」

「柚ちゃんはこの辺の——」

軽く話しをしようと話題を振ろうとしたとき、私の携帯がなった。着信画面には同居人の名前。

「ごめん、電話出るね」

柚ちゃんが頷くのを確認してから通話ボタンを押す。

『お腹すいたー！ ご飯まだ！？』

耳もとに寄せたスピーカーから、聞きなれた同居人の声と台詞が響く。

「うるさいな！」

『何時に帰ってくる？』

「もうすぐ帰るから、大人しく待ってて」

『よっしゃー！ 待ってるからはよはよ！』

「はいはい。じゃあね」

電話を切ってしまうと、柚ちゃんが尋ねてきた。

「一緒に住んでる人？」

「そうそう。お腹減ったから早く帰って来いって」

「それは早く帰らなきゃね」

呆れた様に言うと、ふふっと笑われた。

「つてことで、私帰るね。柚ちゃんも暗くなる前に帰りなよ？」

「うん。ありがとう」

「じゃあね〜」

「ばいばいー」

そういつて私は、柚ちゃんと手を振り合って別れた。

柚ちゃんと会ってから、数日後。また同じように神社に向かう。そこには先日と同じように、階段の一番上で気持ちよさそうに目を閉じている彼女がいた。春先の少し暖かくなってきた風に、ふわっとした黒のセミロングが少し揺れている。

私が声を掛けようと近づくと、ぱちっと柚ちゃんの目が開いた。

「わっ……吃驚した」

「また来てくれた」

嬉しそうにふわりと笑う。相変わらず女の子だな、なんて意味の分からないことを思う。普段一緒にいるのが、女子らしさの欠片も無いやつだから余計にそう思うのかもしれない。

「今日も猫いないんだね」

「うん」

「残念」

私その言葉に、柚ちゃんは少し困ったような顔をしながら笑った。

「紗那さん」

「ん？」

「紗那さんは今好きな人いる？」

「え？」

急な柚ちゃんの発言に、恋愛相談されるのかと身構える。

「私ね、好きな人がいるんだ」

黙ってその言葉の続きを待つ。なんてアドバイスをしたらいいのだろうか、と考えながら。

「できればその人と一緒に暮らしたいの」

高校生でいきなり同棲希望か、と驚きながらも顔には出さないようにする。

「でも、その人もう誰かと住んでるんだ」

しかも、既に相手がいるときた。私がアドバイスするにはレベルが高すぎる。

「でも諦められなくて」

そこで少し柚ちゃんは目を伏せた。

「そっ、そうだよー！ 簡単に諦められるもんじゃないよね！」

そう言った私を、柚ちゃんが伏せていた視線上げて見る。

「あれだよ！ 想い続けてればいずれチャンスはくるって！ 可愛い子に想われて嫌な人はいないし！」

ろくなアドバイスも浮かばずに、適当な言葉ばかりが出て行って情けない。

「紗那さん。猫好き？」

「えっ？ 好き好き！ 好きだけど……？」

それが今、柚ちゃんの恋愛相談になんの関係があるのだろうか。頭をフル回転させても話がつながらず混乱していると、柚ちゃんの大きな声が私を現実に戻した。

「じゃあ連れて帰って！」

そういつて柚ちゃんは座っていた階段を駆け下りて、私の胸へと飛び込んできた。

「えっ」

首に手を回してきたその子を思わず抱きとめた。その体は温かくて、柔らかい。私はその子を知っていた。

肩口に顔を埋めるその子を、べりっと両手で引きはがして抱えてから顔を見る。

「お前……！」

腕の中で、にやあ、と鳴いたその子はどう見ても猫だった。私がこの神社に来ていた理由の猫。

その子を抱えたまま周りを見まわす。柚ちゃんの姿は無い。まさかまさか、と思いがら猫に聞く。

「……柚ちゃん？」

猫が返事をするように、にや、と短く鳴いた。

「嘘……幻覚、見たの？ わたし……！」

仕事で疲れていたのかもしれない。そう思い固まっていると、腕の中の猫が私の体に頬を摺り寄せ甘く鳴いた。

「私が可愛がってたの雄猫なんだけど……！」

そう零すと、また短く猫が鳴いた。